



5  
4431  
1



へ5  
4431  
1-2

門へ5  
院4431  
巻1



芭蕉翁後馬紀

酒りこしし泉石冷くそ向納涼の  
地をふはに湿氣をきけくおを福く  
島次郎あけたり社をゆく引ひき  
原る腸をつらむらうことわひくもあ  
る如きものけをむやまき閉塞一乃  
折くくもあう少くも便をく立返る

古尾

昭和九年  
九月二十九日  
購求



今年孰中を喪なりと歎あへり抑  
以翁孤獨貧窮なりと徳業ありや  
まは量なり二午餘人の門宗意を  
ひらき合にあり因と縁との不可思  
縁ゆありとも勘破しひらき天和と  
年の久深川の多る急火と切とあり  
激下ひらき管をうらふと燃のうらま  
生のひらき是て玉の統のそとの物と物

りくありお如火宅の變を悟り無所  
住の心を教りも其次の心其のまじ  
甲斐の根なりしとていふと其のまじ  
つとありしとていふと其のまじ  
無我らしひらき昔の徳と立歸りか  
りかきしんていふと其のまじ  
流をたしめしとていふと其のまじ  
あひらきしんていふ乃芭蕉を植り雨中吟

古尾

芭蕉世分りし蓋しとる是はつねに  
 作らるるに堪困の友志げくつらむと  
 ちのつらむ芭蕉世分りしはつねに  
 成せりの此圓覺と大巖和尚と  
 易あらりしはつねに  
 信りし或時翁と在卦のつらむと  
 年月時日を古曆の合せて筮考せり  
 多かる華としり卦のあはれは是と

是のあはれ風と吹せ雨と志はつねに  
 うあはれは教と志げく成らむと  
 つねなくからりし世のあはれはつねに  
 潜<sup>カ</sup>なるんはつねに  
 信りし聖典の瑞を感じたるはつねに  
 信りし聖典の瑞を感じたるはつねに  
 信りし聖典の瑞を感じたるはつねに

魚のちかりとほもかきまも慰むまの所  
 乃くらぬ橋を舟を林あり塔ありむの  
 空澄ちと好みの清きやと眼前の奇  
 景も推しこくをのくせちうへありあも  
 ちあかりくはまをさくま聊慈くは  
 るり早うとて貞享初ののち知利  
 ちとま多し大和海より好の奥を  
 心ととて次ありてくまらこよとよせ

おあつとむ是くくのらあまら茶の  
 羽織ひのな芳よあんのまよふまや  
 あつと風狂てこあこりあしのま  
 魚多く鄙のち海をくまらく名就  
 乞向を悪あま安くはまはしつと隠を  
 うあつと月を竹舟み御らふと風乃  
 吹りと物と徳出してこゆの所と作  
 あつと近在隣脚く馬ををせつ

ありちふるもせんは心なみのと  
 只一日もぬらうをわき心氣しつーう  
 衰城して病屋のこゝ田みちりて旅  
 とるゝいん其あうりち津路所の人  
 してつゝゆく幻住菴 後蓑子記 義仲寺  
 おく所至る処の風景を心の物み  
 遊へるも年ちり元来混本寺佛頂和尚  
 千嗣法していさう 禪入法師といはせ



一氣鉄鑄生たえいふほひさうも老力  
 くらげりあう句毎のうひる染せ  
 も自然く山家集の骨髓をにめると  
 あくくもはねをこぼれたの杜子美とと  
 ちるもやうい貧交人の厚く喫茶の舎  
 盟くおとく宗鑑の酒あも散乃ひと  
 りしこ成て自由躰放狂躰世譽つ  
 口くしとて現力九筈實のちあそ

7

風雅の妙もしく白ひゆみさくや大極下  
 流を雪よりひろく入る活るの石の長沼  
 洲原島のゆきの林を川をしくせたるを  
 まはるこの能因由る路く兼好二んま  
 西より高野く寂蓮銭路の縁ハ宗祇  
 宗長白川く通載のまを信しつをむく  
 なりかなうく色蕉翁あついであはれり  
 みえしをゆくよはるるねんはるの境



そのあまらる 奥のあまらるは十餘年が  
 うち杖と笠とをたててあまらる十日も止  
 まる所をくもふく我胸の中をた祖  
 神のさかりしゆふくをたててさかり住  
 片るを路の心や並火施是る慈法和  
 尚のくみのせよあく縁縁しつるを杭  
 ゆちのゆちもゆちをみけるあつるゆちのせ  
 めるしよ馬の合せしはるく遊子う

生を 驚かすに かくして かくして かくして 生を  
あきらむる 四つに ひとつの 深川の 岸を  
又立出さるる 尊や 筆箴の 老を 嘆  
くも 泣き けしき なり し 心 休ま ぬ  
かこしき 心を かくし かくし かくし  
伊賀の ちん たる くる あり ごと 月乃 紀を  
よめる 志に の 詞 かくし かくし  
かあし かくし かくし かくし かくし

かまの かくし かくし かくし かくし  
とく かくし かくし かくし かくし  
九月廿二 膳所 曲翠 かくし かくし かくし かくし  
ら かくし かくし かくし かくし かくし  
の かくし かくし かくし かくし かくし  
かくし 伊賀 山の 嵐 紙 帳 かくし かくし かくし かくし  
菌の 塚 積ツツカエ かくし かくし かくし かくし かくし  
けあ かくし かくし かくし かくし かくし



七月晦の夜より床よりのあき泄痢度  
 志げくこ物いふ力もなしく手足氷のまじハ  
 あら物さくはつまるくこの中のあき東  
 来より弛くるまじ膳所より心愛の古傳  
 たり亦節し別丈州平田の李由つもの流し  
 あり新惟孫と見さくくる新ちをいはれあ  
 なるゆるまのまじりも心神の散乱さるるま  
 じけく不詳さるるまじりくくし進くも招

のまじりおの詞く流くはくくるまじり壁を  
 流くまじり念運を初るまじり耳を入ける  
 みまじり心弱おはけあのまじりまじり

旅ま病てくまじり枯葉をさけける

あら枯葉をさくまじりゆまじり心まじりまじり  
 尸まじりまじりまじり奇執あまじりは難る  
 上子死んまじりのまじり切まじり思まじりまじり  
 し八日のまじり所まじり各まじりねくまじり

賀會祈禱の句

落つまはりしもあはて秋集り木節  
風の元見あきまは露のあは 去来  
是りあはし竹の枝やみそさしい 惟蒸  
初雪のあはしこも引ん佐古の宮 正秀  
神のまはりおと力や雲のいせ 之道  
飛よしりまけつよくりあはれ良 伽香  
託らるゝ也もあはしよ湯等が 支考  
あはれあはれあはれあはれあはれ 吞舟

峠と次鴨のよきなりを流さゆひ 支艸  
日あはれしりまけつよくりあはれ良 支考

是と生并の笑納りて木節り葉を北と  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
流さぬあはれと坐卧のしりまけつよくりあはれ良  
吞舟と舎羅こもあはれと道りあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

一のめさもいれも縁よふきこ師平、  
 つまづつとつ悦みあつよらつたのせいの  
 ちゆけさあきいふよらふもさつたの  
 者うさうさひく麻の衣の垢つまらさきと恨  
 こしよふさきあつと脱にしの衣の衣乃る  
 ちねさき錦靖のさきよふさきとこの  
 ろもさき門紫のもれとこの面目さう九日  
 十日はさつたさうさきと其角和泉の



府津の輪とつあさうさきとこの  
 しつとさきさきさきさきさきさきさきさき  
 らねさきさきさきさきさきさきさきさき  
 ちうひさきさきさきさきさきさきさきさき  
 亀さきさきさきさきさきさきさきさきさき  
 堺さきさきさきさきさきさきさきさきさき  
 心さきさきさきさきさきさきさきさきさき  
 さきさきさきさきさきさきさきさきさき

けちよとくけりけり病床さうくひらの  
 いんくもあふ懐<sup>フキヒ</sup>さのへかみのよ色う何さ  
 かうしうりき年ららの深志の通し  
 住吉の神の山立のりおと新をすもの  
 のうらももれつらうらぬくあさしと母  
 思ひのうら護運の何神の物さうらあよも  
 めこくき侍らうらゆくと洞をよあけい  
 うつくすうぬるをきあふ考うのこいよ

方あくゆふ退りく身昧の心をあさう  
 膝らうゆもて病顔をけらうらぬくあ  
 かくて知死期も定らなうく

吹井らう病を招うん何あうな 晋子  
 と新控しとなくさちうらうえ新む推の  
 おまわりとあのし幻住庵らうお世の遠  
 木曾殿と塚をさうくともあしうあ母  
 けあのうらうらぬるを具おさう死の

ち月のはらけしむらぬらん常よとふ  
せむよものあつちあ表し思ふらん  
此後のはよもなれはけりあまし  
なよ業をらむしるんかのもので寝を  
して原中なり

病中のちまうすもあましり  
川流るるらん寒く笑ひ声 惟光  
志くもて次のるく出る寒さか 文考

おひかおあゆもたし(みさき) 正秀  
園として菜飯あつらひぬ 木節  
皆あまのいし寒くもるん し列

十二日の申此刻くらん死部うも何く  
睡するもいし物打りけおひきり  
も櫃み入るあまの用のまのまに  
らん川舟あつちのせ去来し列あまの考  
惟然正秀あまの節吞舟あまの身うも次る集

予よものよ十人皆もる事袖寒よ旅の  
くちあきるひひひよはまことたけりよのよ  
あゆまきつよひよはま縁名しやうりか  
あいら日比のあめりよよ河らひまのよ  
教をわらひよし細潜の光をうしあひ  
はるもし思ひ志のうらふ名れも暮しは  
昔河らひ今らひのよ一東南西北の指  
うねりつもの栖を定りよ海舟のよ

真松島越の白山ちかきよとてしあてんく  
をあしよしつて驚くはうらの歌あはな  
つあもよひしあひひのあをらよあてん  
あさよしあはよあはらひ人の思らひく  
あやとまらよちちほをわらうて伏見や  
はくしやみだらう義仲寺あはらしと葬  
礼多信ちとるよ一京大坂古傳信あひの  
連え振あけ者とつよあひの信を慕

通るこゝを居る池あるその  
 百余人に淨衣そのか智月とし列の毒  
 ぢいさどく著せまのしん則長仲寺の  
 直愚上人をけらひよるし門おのり  
 引人ら所よかこのよく木号塚乃右  
 おうるく土いおまのつらあり  
 まる柳もきううあての墓れらきりあ  
 とそのまのく印塔をそのひあへ恒を



志先み秋のくせびを極く名のくま  
 平常よ風景をこのちる癖ちうらめを  
 所らなう山田上ゆさうあてし解も  
 ちあみをせ清ゆる舟も記念の紙を  
 のくし樵旅の麻田家の雁遺骨をゆ  
 上の月みくしひさうりちあうる翁  
 ありんく七日う程るちうくあま  
 追善の息ちり幸ああくるハ予しう

くつゝのあけおほを合感して愚く千一紙  
享の紙を残りゆるし紙をけりけり  
のつしは我翁をたのめん翁の是を  
回向乃多ふりて

於栗津義仲寺牌位下 晋子書

元禄七年十月十八日 於義仲寺

追善之誦讚

晋子

おのふりしを笠に隠さや板を毛  
温石はちりしる市をたす  
比知のわらうとくむは山平 丈叶  
つみかへる土の縁を多しある 惟存  
つみかへる市の名も此も紙 木節  
はらうとくたを乃紙 李由  
森の名をわのちりし月之紙 之道





世にけの茶のゆ鶏体し 去来  
あつた田中が母をよきとまり 曲翠  
旅く 旅く 行 旅を 正奔  
勝金魚子とく ねえ肩の物思ひ 卧高  
ゆのらすくを想く のむ 泥足  
こがはふと舟の豆腐をせ活のすし 列  
あつたよき人 色 旅る あやけを 芝相  
著るは 葛藤よ白く 天氣 合 昌房  
車の休を はげしく たくの 探芝

世のの横へ 旅を ぬく川 胡故  
負く 下へ 居 旅する 牝玄  
菴のあつた 室い ちのあつた 雨 游刀  
あつた 人 少く あり お旅る 旅 蘇葉  
世のあつた 集のあつた けの 惜まら 智月  
多羅のあつた 立を とく せ 育つ 春舟  
けのあつた を けく み け 旅 旅 旅 土芳  
けのあつた を けく み け 旅 旅 旅 卓袋  
けのあつた を けく み け 旅 旅 旅 美椿

世  
世

昔よるる娘をねとりのらん 野童  
一長くして未つひ花を痛せりたり 素聲  
糸の多きく子に酒 万里  
酒の思のかきと吹志はる 識々  
藪くあまのく雀とる流 這萃  
塩賣のつらつらあさ 世筒 許六  
力のぬりくうけ志まの絹 回鳧  
新もは雀をさそそまの外も 荒雀  
くあまのく子に雀 楚江

小屏風の内より雀は乱し 野明  
四つよるる雀を痛せり 風国  
福んより子雀 木枝  
か人堂みては雀をこり 晋子  
ひららちも侍氣みおや 角上  
あまのくと雪をく 之道  
あまのくと雀のく 之来  
椀より雀をく 土芽  
春より雀をく 芝柏

雀  
雀

ぬらんちきさく 如くまお 厨高  
 才子みま 持人のまをまの 尚白  
 月ころの 門の弁乃 垢離 昌房  
 軒のあ 菫あさるる 丹野  
 此らの 新志すりな 犬艸  
 花のそ ちあし 旅んを 惟然  
 煮の 粥くら 其の川 天椿  
 小休あつ 通ある 堀乃上 正秀  
 流澄と 出る川 石 田息

日ありく 葉の重なり 朴吹  
 袋の猫あ ちりき 角上  
 里とハヤ 人遠よ 家の寺 泥足  
 七つ 出さる 舟多形 尚白  
 二季は ぬめ 國くの掛 卓袋  
 内み 汁と 子のの 採芝  
 うしり 山を 刈ある 遊刀  
 牛を とあ 月を 月見 楚江

此方より地の丸くあつて名は伊勢 魚光  
 社は五倉十倉立なりと云 音子  
 祈りくく代交紙 殿 風國  
 弁 溢る氷上情を引けり 文考  
 乳母と隣り送る啼 正秀  
 獅子舞の拍子あけある昼下り 丈艸  
 雨氣乃ち牛尾かくし 昌房  
 在祈り 普法を云 即高  
 行町出り 畠新 田 之道

多布しのは合よりよ昏の光 吉来  
 木像より倚子をゆるる 泥足  
 ときらけむらうく半句らむし 尚白  
 なるのまゝかふる名 卓袋  
 漣ア我そのうしそ新の天 角上  
 控よりむらも志のハ聖霊 牝玄  
 かうくせ花るる人ハ負け珠 土芳  
 村よりあつて伊勢講の種 芝相  
 暇みあつて小舞のあき 加減 這萃

軍と介しを祀又がくは物 卧高  
 淵を彫く陸壇の上をを過る 晉子  
 孰日あむふく念珠押もむ 正秀  
 尖ノの意はづらん 臣著寒し 文考  
 コトヨクえ替々大小の額 魚光  
 味啼つきはゆゆ力をおわす 楚江  
 かみ 楚華の何り 可矢ふ 游刀  
 ちんくく 恨く 妙き ちり じり 風國  
 新赤う ける ちり 酒の 碎 之道

白鳥の陰を葛を子 採せり 採芝  
 と河あかり 天下 一 去来  
 飯をわく内をもちる 尚白  
 叩者子 積をみく 回危  
 うら寒よ 塚格子の窓 芝相  
 文庫をあらは 福山伏 土芳  
 信きも 唯  
 海くも 近よ 夫州  
 寮ありる 鎖をけ 北玄

思くらく情の奥み戒名と考  
青天おちるさうくむのうらむく 去来  
巢りし生るさうく千里言 正秀

七回十人満を真行大津膳所  
京嗟峨括津伊賀之連衆也各  
感愁眉而不求巧言也

傷亡師、終焉作句 初七日迄



志せは色なきも十世の泪りふ 宗玄  
啼うちの相氣をらませ涙後 傷李由  
そら下嵐も寒くよととちり 大津水常  
つるやう宗紙も寸白おの素 日し列  
りあもも泪もあや塚の素 膳本昌房  
霞の墓もゆるくやあも教素 僧文州  
了んの時ゆりよあといん帰む 吉根許六  
用とやみきる後の舟のらん 同波村

墓もやう十子あふせのくねん ぞ探芝

ね席の濁るあまやねの糸 大徳堂江

めくも着の老の髪 吾の糸 聖田成夷

木弓拂やあまうの月 涙の上 大つ織

日影に 塚のくねやぬあま 日あま

月雪よせよ体みや 笈の脚 傷千那

志げ箱子紙子あまゆね 大つ尚白

了る翁の涙のあまゆね 奥羽塞をさうりく  
人しるりの星書をもさうりく ちさうりく  
くさうりくあまゆね ちさうりくあまゆね  
さうりくあまゆね ちさうりくあまゆね

ちあらしを 回家河内 京徹士

くせぬあまの寒と 春の色 傷角上

法法の笑うけて 墓の糸 京野董

くせぬあまの 位なま 傷千那

身にあまの 屯の糸 傷千那

悲しきもあまの 糸 傷千那

我まあまの 糸 大坂之石

石あまの 墓の糸 日芝拍

藤の糸も 入る 野山小 傷千那

八月四日比の敷方の新歌

京春沈

十六日晉子を幻住庵平とものあは  
まのくき新としいる権のふをきき  
いますこもく平侍をちるる世なり

あつしや何を力あつてくると

曲翠

無れたくあはあ色つるむあは

正秀

うりくさひさすくさるあは

卧高

糸ちるけるあひの岩とあは

泥足

見送りし房の姿や神のま

霊椿

すねりしはああああああ

晉子

あつしや何を力あつてくると

燒峨地

線まの無きあは枯色蕉

月荒雀

神ちるの千もも帰四塚の塚

大坂春舟

あは蕉衣あつて白くま

ぢく魚光

立うのし神のりくや墓のお

日回鳥

悔まねく無きあはあは

日游刀

あはあはあはあはあは

日朴吹

あはあはあはあはあは

大木枝

あはあはあはあはあは

ぢく這華



けしげのあまをさけり土の窓  
 大は土竜  
 ちり隙のあまをさけり土の窓  
 ちり隙を  
 ちり隙のあまをさけり土の窓  
 日伴尼  
 けしげのあまをさけり土の窓  
 日伴尼

二七日廟参之悼句所々文通

吾とわく徳の光也かみ山  
 小枝茂やあまをさけり土の窓  
 尺草  
 みの目也所よあまをさけり土の窓  
 大坂か柿  
 けしげのあまをさけり土の窓  
 ちり隙

同きさのあまをさけり土の窓  
 日吾我  
 木の葉えん世の形やしの木笠  
 日松泉  
 けしげのあまをさけり土の窓  
 日朝巫  
 菊極はえん紀り  
 日重氏  
 けしげのあまをさけり土の窓  
 日重氏  
 けしげのあまをさけり土の窓  
 女素聲  
 けしげのあまをさけり土の窓  
 女万里  
 けしげのあまをさけり土の窓  
 東門惟松  
 けしげのあまをさけり土の窓  
 女可南

みのり月 襟よりけしる 洞あ  
 ち 徹房  
 くらきつげとまねもゆとぬ目た  
 日 麻三  
 木急の目もも候のしとれ戸  
 日 砂上  
 カそく 墓よりけしる 向震  
 日 蚤鳥  
 糸柳のけしる 名とらふ 向震  
 向震  
 梅おしとらふの 歌もや竹の裏  
 さう来儿  
 西風くつとてとらの 志らね  
 小倉雨夕  
 幻のよみふらむ 枯母の 橋  
 さる有  
 カあふ 獅のあぐさやれ 枯母  
 老根木

新巻の 巻よりけしる 洞あ  
 ち 徹房  
 くらきつげとまねもゆとぬ目た  
 日 麻三  
 木急の目もも候のしとれ戸  
 日 砂上  
 カそく 墓よりけしる 向震  
 日 蚤鳥  
 糸柳のけしる 名とらふ 向震  
 向震  
 梅おしとらふの 歌もや竹の裏  
 さう来儿  
 西風くつとてとらの 志らね  
 小倉雨夕  
 幻のよみふらむ 枯母の 橋  
 さる有  
 カあふ 獅のあぐさやれ 枯母  
 老根木

大根月 ちとらふ 志らね  
 京其木

二七日伊賀連流追悼句

くらきつげとまねもゆとぬ目た  
 日 麻三  
 木急の目もも候のしとれ戸  
 日 砂上  
 カそく 墓よりけしる 向震  
 日 蚤鳥  
 糸柳のけしる 名とらふ 向震  
 向震  
 梅おしとらふの 歌もや竹の裏  
 さう来儿  
 西風くつとてとらの 志らね  
 小倉雨夕  
 幻のよみふらむ 枯母の 橋  
 さる有  
 カあふ 獅のあぐさやれ 枯母  
 老根木

りみへり啼く心ゆくは鴨  
 六るくは孫おくりあつた  
 おろは川の流れのまの  
 中へりてはのけをぬり  
 かなはれりてはのけをぬり  
 手向へはのけをぬり  
 けやもはこれとてぬり  
 多し種のをあはれぬり  
 山茶もての敬はれぬり

杉並配力  
 尾本首蘇  
 杉浦  
 一徳  
 依治洞水  
 西沢魚日  
 明  
 毛氏  
 山岸陽和  
 水也枝華

消えつるあまもあつた  
 くらもあつたの早やあつた  
 芭蕉くはあつたの  
 あまの心はあつた  
 つまもあつたの  
 茶の心はあつた  
 けの心はあつた  
 菊の心はあつた  
 あまの心はあつた

大  
 万平  
 猿  
 小  
 桂  
 井  
 馬  
 漢  
 中  
 小  
 年  
 子

指原寺新入る男麻呂系 系田作木

笠手迄時多きつゝ 小南 井ノ口 くら賀

そのまゝに時多きつゝ 山形 宗由次

すまゝに時多きつゝ 山形 太保仙杖

新くそのまゝに時多きつゝ 山形 松本冰固

水多の遠よわねや 協の果 内神九節

そのまゝに時多きつゝ 山形 栗津よりつゝ

そのまゝに時多きつゝ 山形 文字の村衛 いら半残

そのまゝに時多きつゝ 山形 神の下 西崎百成

恨あまゝに時多きつゝ 山形 和歌あま 浦水

ほろゝに時多きつゝ 山形 母れ世の為なり 来川鳥栗

四七日をめぐりて 普音文通之句

猿まの乃神のまゝに時多きつゝ 山形 伊世孫州

弓のまゝに時多きつゝ 山形 日園友

矢くしてあまゝに時多きつゝ 山形 日定芽

信ちのまゝに時多きつゝ 山形 日宗比

み了後下 兼笠の像と ちち 日斗從

五一のまゝに時多きつゝ 山形 日芦本

何れも合ふとての悲しきよ  
 せらふものなきとてんあはれ笠  
 平の底に水鏡のこころあり  
 梅川也一羽をまねく鳴あき  
 雲のちりて光方なりと物舟は  
 舟のちりて光方なりと物舟は  
 舟のちりて光方なりと物舟は  
 舟のちりて光方なりと物舟は

上終

ふ

